

論文の和文要旨	
論文題目	日本人英語学習者の話し言葉と書き言葉 における言語変異
氏名	野村 真理子

本論文は、日本人英語学習者の話し言葉と書き言葉における言語変異を調査し、2008年及び2009年に文部科学省が公示した中学校及び高等学校の新学習指導要領が目指す英語教育に教育的示唆を与えることを目的としている。中学・高等学校用の新学習指導要領の外国語では、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことにおけるコミュニケーション能力の育成に重点が置かれ、4技能の総合的・統合的な指導が強調されている。本論文は、日本の中学・高等学校の英語学習者が産出した話し言葉と書き言葉における中間言語変異を明らかにしようと試みる研究であり、話すことと書くことの統合的な指導への貢献が期待される。

上で述べたテーマを追求するために、本論文では、次の4つの目的を設定した。

- (1) 日本の中学生・高校生が産出した話し言葉と書き言葉コーパスを構築すること
- (2) 第二言語習得研究で用いられる多様なアプローチを組み合わせて、中間言語変異を理解すること
- (3) 産出モードの違いと英語の熟達度レベルの違いによる言語変異を明らかにすること
- (4) 話すことと書くことの指導に対する統合的なアプローチを提案すること

これらの目的を達成するためにまず、日本の中学3年から高校3年までの各学年の生徒から3つのトピック（A: あなたはご飯派それともパン派？, B: 将来訪れたい国（または日本の地域）,

C: 印象に残った学校行事) についての発話と作文を収集し、324 人分のデータを含む話し言葉と書き言葉コーパスを構築した。そして、この構築した日本の中学・高等学校の学習者の話し言葉と書き言葉コーパス—the JSSLSW (Japanese secondary school learners' spoken and written) corpora を使用し、第二言語習得研究の分野における多様なアプローチを用いることにより、異なる産出モードと熟達度レベル間における言語変異を明らかにするために、さまざまな種類の分析を行った。

本論文は 11 章で構成されている。第 1 章では、上で述べたような論文のテーマと具体的な目的を示し、本研究を行う背景と根拠を説明している。

第 2 章では、先行研究を概観し、本論文がとる立場を明確にしている。まず、中間言語変異関連の先行研究を概観し、中間言語変異に影響を与えるさまざまな要因の中で、本研究は、産出モードの違い（話し言葉と書き言葉）と熟達度レベルの違いに焦点を当てることを明らかにしている。そして、これら 2 つの要因に焦点をあてて、初期の第二言語習得研究及び近年の学習者コーパスに基づく研究における言語変異に関する研究、さらに、日本人英語学習者及び英語母語話者の話し言葉 vs. 書き言葉の比較研究を概観し、注目すべき研究の内容を簡単に説明している。このような先行研究の概観をとおして、多くの学習者の言語変異研究は、主として量的研究であり、言語形式中心の表面的な分析を行っており、同一学習者が産出した同じトピックについての話し言葉と書き言葉のペアのデータを大量に用いた研究が不足しているという問題が明らかになった。そこで、本研究では、これまでの研究より多くの話し言葉と書き言葉のペアのデータを収集した the JSSLSW corpora を用いて、量的な研究方法と質的な研究方法の両方を組み合わせた mixed methods approach と呼ばれる研究手法を用いて、深く幅広く中間言語変異を調べることを目指すこととした。

第 3 章で、データ収集の方法と the JSSLSW corpora の構築について説明し、第 4 章から第 8 章にかけて、この学習者コーパスを用いて、mixed methods approach を適用して行ったさまざまな分析を提示している。

第 4 章は、異なる産出モードと熟達度レベル間で、総語数と key words (話し言葉あるいは書き言葉の特徴づける語) の観点から行った学習者の語彙使用の分析を示している。熟達度レベルとして、本分析では、英検の取得級 (3 級, 準 2 級, 2 級) が用いられた。分析の結果、産出モードと熟達度レベルは共に総語数に有意な影響を及ぼしていることを示し、産出モードと熟達度レベルの間には交互作用が見られた。発話と作文データの語彙を比較することにより、6 つの key words が抽出された。フィルター(#F#)と I の 2 語が話し言葉を、for, that, was, it の 4 語が書き言葉の特徴づける語であった。

第 5 章は、先行研究に基づいて選択した 10 個の言語特徴と 12 のサブカテゴリーの頻度差を発話 vs. 作文間で統計的に検証することにより、産出モードの違いによる言語特徴の変異を調べたものである。調査した 10 個の言語特徴のうち 8 個が異なる産出モード間で統計的に有意差を示し

た。この量的分析に引き続き、いくつかの言語特徴（接続詞 (*but, because*)、*I*、冠詞、動詞の形態素など）について、コンコードンスラインを詳細に調べることにより、その特徴的な使用を記述した。

第6章は、産出モードと熟達度レベルの違いを考慮に入れた冠詞使用の変異の調査を示している。冠詞使用の変異性を発話 vs. 作文、英検の熟達度レベル間で、SOC (suppliance in obligatory context method: 義務的文脈での使用を分析)、TLU (target-like-use method: 義務的文脈+非義務的文脈での使用を分析)、form-function analysis (冠詞の形式と談話における機能の関係を分析)、multi-factor analysis (いくつかの要因が同時に冠詞使用に及ぼす影響を分析) のようないくつかの分析方法を組み合わせて調べた。このような方法を用いた詳細な分析により、日本の中学・高等学校の英語学習者の冠詞使用の変異性を明らかにした。

第7章では、動詞の過去形の使用に焦点を当てて、語彙アスペクト (即ち aspect hypothesis) と談話構造 (即ち discourse hypothesis) の2つの観点から、発話と作文の narratives (テーマ: 思い出に残っている学校行事) を用いて、日本人英語学習者の動詞使用の変異を調べている。これら2つの分析をそれぞれ行った後、語彙アスペクトと談話の分析結果を組み合わせることにより、さらに交互作用の分析も行った。分析の結果、2つの仮説とも支持され、また、語彙アスペクトと談話構造は、過去形の使用に関して交互作用があることが示された。

第8章では、同一学習者の発話と作文の産出データから意図的にペアのデータを選択し、冠詞使用と動詞の過去形の使用の観点から、同じ学習者の発話 vs. 作文を比較分析している。その比較分析で分かったことに基づき、冠詞の4つの習得段階及び過去形の使用の4つの発達段階の仮説が立てられ示されている。

第9章は、話し言葉と書き言葉コーパスを用いて行われた分析から得られた結果に基づき、日本人英語学習者の言語変異の問題について総合的に議論している。まず、第4章から第8章までの分析から得られた発見をまとめ、本研究のために構築したコーパス—the JSSLSW corpora—の有用性と mixed methods approach を用いることの妥当性を論じている。本章ではまた、本研究の限界を述べ、将来の研究への方向性を示している。

第10章は、日本人英語学習者が示した異なる産出モードにおける言語変異を考慮に入れて、話すことと書くことの指導を統合するアプローチに対する教育的示唆を与えている。まず、いかに話す活動と書く活動を統合することができるかについての基本理念を明らかにしている。話す活動と書く活動は、社会文化理論でなされている主張に基づいた順序で実施されるべきであると提案し、話す活動→書く活動の連鎖を提示している。そして、本研究において異なる産出モードで言語変異を示したいくつかの言語特徴に焦点をあてて、中学・高等学校での英語の指導でそれらの連鎖を実現するいくつかのサンプルタスクを紹介している。

最後に第11章では、論文全体をまとめ、本論文が、将来の第二言語習得研究と新学習指導要領のもとでの日本の中学・高等学校の英語教育に貢献するものであることを期待している。